

時空の漂泊

(二〇二一年五月三十一日 第六十五号)

高橋 滋

広島・里山便り (五)

気象庁が天気解説などで使う「平年値」は過去三十年の気象データの平均値であって、十年毎に更新されている。今年、「一九七一年から二〇〇〇年まで」から「一九八一年から二〇一〇年まで」に切り替えられ、五月十八日から適用されたところである。

旧データでは、

「広島市では、五月一日に二十二度を越え、その後ほぼ一週間で一度ずつ上昇し、月末には二十六度に近くなる」

「廿日市の津田では、二十二度を越すのは、五月十九日になってから」と説明されていた。



切り替えによって広島市の二十二度越えは四月二十九日に二日早まったただけであったが、津田の二十二度越えは、十日以上早まり、五月八日となった。「津田は一週から十日の遅れだな」と感じていたので、この変更で実感に近いものとなった。

今年は、三、四月が寒かった。

四月の末になって、佐伯の園地（廿日市津田）の新緑が、輝きを迎えた。

隣家は定住型の住宅だが、もともと林地で木々が多い所だったが、そこにさらにいろいろ植物が植えられ、私も楽しませてもらっている。私の小屋に向かって坂を上って行くと、まず目に飛び込んでくる木々も隣家のものだ。

春先の変化の歩みは遅いのだが、突然、新緑と三ツ葉ツツジの花が朝日の中で透き通るように輝き、「ウワー」と声を上げてしまふ景色に一変する。

今年はそれが、半月ほど遅かったようだ。隣家の三ツ葉ツツジの花も少ない。早春の花（球根で越年し早春から伸びて花を咲かせるチューリップやアネモネ、芝桜など）も遅ればせながら満開となった。

寂地山しやくちざんく松の木峠いぬもちぎょうく犬戻峽

五月四日に、寂地山というところに行つた。寂地山は、第二回に述べた冠山につながる山で、高度も一三三七mとほとんど同じである。

冠高原にある松ノ木峠(八八〇m)から、一気に断層の谷に下り、そこから犬戻峽という溪谷を遡った。四月に降った雪が登山路に少し残っていた。

「カタクリはまだ早いかな」

例年なら五月の連休にはカタクリ(片栗)の花は終わってしまったのだが、そんなことを思いながら登ったとこ



ろ、頂上に近い尾根の平坦部分にカタクリが咲いていた。真つ盛りであった。やはり季節の推移は遅れている。

途中には、エンレイソウ(延齡草)やヤマエンゴサク(山延胡索)が咲いていた。

数年前、「風のガーデン」という

連続テレビ・ドラマの中で、エゾエンゴサク(蝦夷延胡索)という花が効果的に使われていた。その記憶が強かったので、ヤマエンゴサク



(山延胡索)なのに、それを一瞬「エゾエンゴサクかな」と思ってしまった。気になって改めて調べてみたら、やっぱり共にケシ(芥子)目ケマンソウ(華鬘草)科キケンマン(黄華鬘)属の類縁種だった。

この仲間はユーラシア、特に中国に多く分布し、日本でも二十種近くが確認されているが、ムラサキケマン(紫華鬘)など雑草扱いするのには惜しい風情のものが多い。

五月の我が園地

五月前半の気温ほぼ平年並みに推移した。気温が二十五度を超えると途端に蒸し暑くなるが、それが二十二〜二十三度で推移した。外仕事をしていて非常に気持ちが良い。

これは植物にとっても同じなのだろう。この時期、五月の初めから二十日頃は、樹木・草花の枝や葉も最も伸びる時であり、

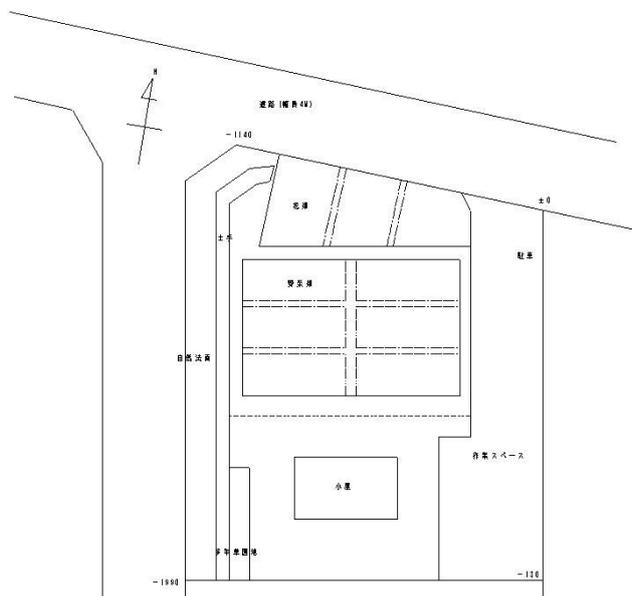
鮮やかな時である。写真は五月八日の我が園地の姿である。春先の花々の盛りはもう過ぎていく。地中の越冬株の状態で寒さをしのいだ宿根草類は、チューリップのように一斉に咲くのではなく、育ちにに応じて順次、花を付ける。ちよつとした花の休息期間で、その間を狙うように野菜類が存在を主張する。

中央で目立つのは、ジャガイモ(馬鈴薯)、タマネギ(玉葱)、エンドウ(豌豆・絹莢)で、左側には、ラッキョウ(辣蕪)、ニンニク(胡)、ネギ(葱)、ニラ(蕪)などの香味野菜がある。左側のカバーが掛かっている



るのは連休中に植えた夏野菜である。トマト、ナス(茄子)、キュウリ(胡瓜)、ピーマン類である。

我が菜園の全体のレイアウトは、やや古い図面だが、次の通り。



図面は上が北であり、写真は、その図面の上方にある道路から撮ったものである。

野菜は中央部の10m×6mの長方形の部分
を六分割してローテーション（輪作）して
いる。一区画は十平米、一アールの十分の
一。そのため堆肥一アール二百kg入れると
ころには二十kg入れるといった具合になり、
ともかく計算がやりやすい。

野菜は自然の植物ではない

野菜は、長い時間をかけて、人間に都合
が良いように、ドメスティケーション
(domestication) …… 動物でいう「家畜化」
をしてきたものである。

余談だが、動物の場合は、domesticateの
家畜化する、domesticationの家畜化という
日本語訳がしっくりするが、植物の場合に
は、どうも適切な日本語訳がないように思
う。「栽培化する」「作物化する」、「栽培化」
「作物化」などの言葉が使われているが、
「家畜」という言葉ほどこなれていないよ
うに思う。

日本原産のものが少ないことにでも関係
があるのだろうか？

それはともかくとして、野菜が「栽培化」

「作物化」されたものであることが、野菜
の連作障害に深く絡んでおり、「輪作」が野
菜作りの基本となっている。海外テキスト
でもまず「ローテーション」について触れ
られている。

「輪作」は思い付きでやるとすぐに行き
詰まってしまう。夏野菜、豆、ジャガイモ、
タマネギなどをキーに、数年分を計画しな
ければならない。

「エクセル」に区画を配列し、過去の履歴
を踏まえて、三〜四年間の休耕期間を設け
るように基本を定める。肥料の残り具合や
栽培期間などに基づく「輪作の原則」のよ
うなものがある。

「ロング葉もの」と呼んでいるラッキョ
ウ（辣蕪）やニンニク（蒜）、ネギ（葱）など
は二〜三年場所を固定してしまっている。
ジャガイモは春秋二回作っている。

当初は、イチゴも手掛けていたが、畑の
占有期間がほぼ一年と非常に長いので、現
在は作るのを止めている。

と言うよりも、庭の縁に放りっぱなしで
も、毎年、少しではあるが、恵みをもたら
してくれるようになっていく。

植え付けの一ヶ月前、遅くとも二週前ま
では前作を整理し、堆肥などを入れて土
作りを行う。このやり方と苗の準備によっ
て「作付け計画」が決まってくる。上手な
人は一年に何作も作っているが、私は下手
で、空いた場所がかなりできてしまう。土
地の利用効率が悪くなっている。

私の野菜作りは一九七一年から

夏野菜は家庭菜園の入門コースであるが、主役でもある。気の早いホームセンターでは三月から店に苗を出すのが、農協での取り扱いは四月末からである。「八十八夜の別れ霜」と言うように、立夏りっか（今年は五月六日）の直前までは、最低気温が二〜三度まで下がることを考えて置かねばならない。

実際、今年は、そんな日が四月下旬に五日もあった。○・三度、○・八度まで下がった日があった。今年の八十八夜は五月二日だった。

昨年、夏野菜は全体として出来が悪かったため、今年は植え付けを遅らせた。しかし、連休明けまでは待てず、五月二日に植えた。その後、ベランダで種から育てたキュウリ（胡瓜）を植え付けた。そして先に紹介した五月八日の写真の姿となった。

なお、「スペシャリティ」と称して、毎年、変わったものを少し作っている。

お茶の材料になるエビスグサ（恵比須草：ハブ草）、ハトムギ（鳩麦）の野生種のジュズダマ（数珠玉）、染料にするアイ（藍）、ワタ（綿）、ソバ（蕎麦）、ムギ（麦）、ズッキーニやシカクマメ（四角豆）などを作った。今年にはモチキビ（餅黍）とソバ（蕎麦）に一区画の半分を割いている。

私が野菜作りを始めた年は昭和四十六年（一九七一年）である。

野菜作りを始めた年をハッキリと記憶しているのは、一九七〇年春に結婚し、その一年後の一九七一年に、小さい一戸建ての畑付き借家に移ったことで野菜作りが始まったからである。

結婚し、最初は都会の中心部に近いアパ

ートに借りて住んだが、一DKで狭くて来客もままならなかった。

そのため約一年でアパートを引き払い、一九七一年三月に引っ越した。山裾の小さい一戸建ての借家で、段々畑が付いていた。それで引っ越した翌月の四月末、初めて野菜の植え付けを行うこととなったのである。

基本給が二万七千七十円の時だった。まだ土曜日は休みではなく、一ヶ月間で二百時間は働いていた。

その時代の苗購入記録として、トマト三十円×三本、ナス二十五円×六本、ダイコン、インゲン、エダマメ、レタス、ヒヨウタン五十円×三本、メロンなどと書かれたものがあった。

当時の菜園の写真はすでに劣化して色が悪い。しかし、それを見ると、長いこ

と同じことをしてきているなあという感慨が改めて湧いてくる。



なお、現在の苗価格は、安いものが五十
八円、少し高いのが七十円、農協だと九十
円程度と言ったところだろう。接木苗だと、
百八十円、二百四十円ぐらいするものがある。

野菜の起源

野菜作りは、現在、一種のブーム状態に
ある。本屋の雑誌コーナーを覗くと、「やさ
い」、「野菜」、「畑」という言葉のついた雑
誌が六〜七種は見られる。今までにないこ
とである。

昨年、「ミックスレタス」というものを試
してみた。各種のレタスが混ざっているベ
ランダ栽培向き野菜である。かつては、レ
タス栽培はやや難しいものであったが、「ミ
ックスレタス」は簡単に芽を出し、生育も
揃い、しかもベビリーフの状態で食べら
れるので、本当に手軽でベランダ栽培向き
であると感心させられた。

「ガーデニング」という言葉が流行した
のは、一九九〇年の「花の万博」（国際花と
緑の博覧会）以降である。それまでは「家庭
園芸」、「庭いじり」であった。

九十年代後半にガーデニング・ブームが

訪れたが、これを支えたのは「新しい品種」
であった。矮生種あいせいしゅ（たとえば背の低いヒマ
ワリなど）、小型・多花性品種（サファイニア
など）、早咲き品種などが数多くの新品種が
創り出され、それによってファン層が拡が
った。タキイやサントリーなどの種苗メー
カーの努力がブームを牽引した。

野菜作りにも、それと同じようなところ
があるようである。

新品種とえば、私の畑で採取した「コ
ウサイタイ」（紅葉苜）の種を使って、昨年
の秋から今年の春にかけてベランダ栽培を



行ったところ、畑で紅カブ（紅蕪）と交雑したのか、「何」とは判然としないモノが繁茂した。

葉が赤くて綺麗なのだが、カブ（蕪）のよ
うな塊があり、花の茎がしっかりと立ち上
がって咲いた。普通の菜の花とは異なる、
風情のある姿となった。

調べたところ、カブ（蕪）はアブラナ（油
菜）科の植物であって、アブラナ科の植物は、
昔は四枚の花弁が十字架のように見えたこ
とから十字花植物と呼ばれていたこと、そ
して非常に変化の範囲が広いなど、これま
で知らなかったことをいろいろ教えられた。

そして勢い野菜の起源にも関心を持つよ
うになった。

カブ（蕪）の仲間、いわゆるカブだけで
はなく、野沢菜や聖護院蕪までいろいろ変
異がある。キャベツも仲間である。その親

類のバリエーションの拡がり（ケール、ブ
ロッコリー、カリフラワー、メキャベツ：
…）、葉が巻くようになった経緯、日本での
普及の歴史などあまり知られてはいない沢
山の物語があった。

さらに穀物の場合には、その種の発展、
変化・進化が人類の文明の発展と切り離せ
ない歴史を持っていることも教えられた。

岩波新書に「栽培植物と農耕の起源」（中
尾佐助著 一九六六年）という本がある。現在
も版が続いていて、二〇〇〇年六月現在で
四十六刷を数える。

そこで述べられている「根栽農耕文化」

（東南アジア、バナナ、ヤムイモ、タロイモ、サト
ウキビなど）、「地中海農耕文化」（メソポタミ

ア、ムギ類）、「新大陸農耕文化」（中央アメリ
カ）、「サバンナ農耕文化」（アフリカ）とい
った分類は、初版から五十年経た今でも有

効な学説として残っている。

最近の本では、「麦の自然史：人と自然が
育んだムギ農耕」（北海道大学出版会 二〇一〇
年）、「サゴヤシ：21世紀の資源植物」（京
都大学学術出版会 二〇一〇年）といった大著が
ある。

いずれも専門家による四百ページに及ぶ
文明史の視点からの科学読み物で、大きな
拡がりと深さを持っている。

これらの本を読むと、新石器時代以来、
一万年以上の時間をかけて「育種」されて
きた栽培植物ついて、非常に広い分野の研
究者たちによって地球規模で現地調査を含
め実証が積み重ねられてきていることが分
かる。

同時に、改めて食糧問題はエネルギー問
題以上に二十一世紀の地球の大きな課題で
あると思われ知らされる。

今年五月の作柄

この五月十日には、梅雨前線のような前線が本州に停滞し始めた。南には台風一号が発生した。その後は、スカッとした五月晴れは少なく高温多湿の日が多くなった。



そのためだろうか、ここに来て、植物の成長が一気に進んだようだ。

五月二十一日、周辺の緑は一段と勢いを増し、野菜畑の緑も濃くなった。タマネギ（玉葱）の玉が太り始め、ジャガイモの花が咲き始めた。夏野菜はほぼ根付いて成長し始めた。「活着」し、トマトには花が付き始めた。ナス（茄子）の枝も伸びてきた。

そして「トッキョキョカキョク」と鳴くホトトギス（時鳥）も飛んで来た。「毎年、カッコウの声も同じ日に聴くなあ」と思っていたら、遠くでカッコウ（郭公）が鳴いた。昼過ぎには、「ムゼームゼー」とハルゼミ（春蟬）も鳴き始めた。

小屋の屋根からすっかり緑となった隣の広葉樹林（小瀬川源流の小川が流れている）を眺めたら、木立の下に初夏の野の花が咲き始めたのが見えた。

今年は、紫色のシソ科の花が大変目立つ。

これまでラショウモンカズラ（羅生門葛）と理解していたが、花を持ち帰ってよく調べたら、どうもタツナミソウ（立浪草）の仲間らしい。それもかなりの珍種……四国、中国地方にしか見られなくなった絶滅危惧種のハナタツナミソウ（花立浪草）らしい。

「本当かな？」と思うものの、実物を眺めていたら、「タツナミソウ属の中で最も花が大きく美しい」という記述に本当にピッタリ当てはまるような気がしてきた。

五月下旬はほとんど雨模様であったが、この五月二十六日、ついに例年よりもかなり早く梅雨入りした。

五月二十八日、アサヒビールが保有する「アサヒの森」の観察会と講演会「国際森林年」にみる森の多様性があった。生憎、雨で森林歩きは出来なかったが、アサヒビール



が二千二百ヘクタール近い森林を広島県内に持っている、森林管理の事業所も持っていることなどを初めて知った。

樹木（緑）が炭酸ガスCO₂を固定する役割を改めて反芻した。「フィランソロピー」

(Philanthropy)という言葉が久しぶりに頭の中で舞った。

五月二十九日、台風二号接近中だが、野

菜が気になって津田（佐伯）の園地に出掛けた。このところの日照不足で全体的に育ちが遅い。ナスの花がたくさん咲いている。

まだ虫や病気は出ていないが、この梅雨模様の中、夏野菜は上手く育つだろうか。

高橋 滋 広島県森林インストラクター・広島市里山整備士

1968年 東京大学工学部航空学科卒業

1968年 東洋工業(株) (現マツダ(株)入社)

以降、主として商品企画・経営企画部門。
電気自動車、都市交通システムの調査研究
中長期経営計画、商品計画

乗用車の基本設計、商品企画、商品開発主査などを担当
この間、1988～1991年、北米 R&D の副社長 として
商品企画・評価・人事・財務担当に従事。

2001年 商品企画ビジネス戦略本部副本部長を最後に早期退職

2002年 (財)広島市産業振興センター ・

中小企業支援センタープロジェクトマネジャーに就任

2008年 退職 現在、広島県森林インストラクター・広島市里山整備士として活動中。